

Derryl N. Maclean 著
Religion and Society in Arab Sind

稲 葉 穰

スインド Sind とはほぼ現在のパキスタン南部に当たる地域である。アラビア語地理書や中国僧の旅行記によれば、歴史的には、アロール(現サッカル近郊)以南のインダス河流域の平野地帯を主に示すと考えられる。アラブ・ムスリム軍を率いた Muḥammad b. al-Qāsim がブラフミン王朝(創立者 Chach がブラフミンであったためこの名で呼ばれる)を打倒し、この肥沃な地を征服したのは、A.H.93年/A.D.711年(以下A.H., A.D. 省略)のことである。それからガズナ朝による北インド侵略がはじまる5/11世紀までの間、スインドはインド亜大陸における唯一のムスリムの地としてユニークな地位を保ち続けた。しかしその間の同地の状況については、年代記史料が極めて乏しいせいもあり、未だ不明な部分が多い。

本書はこのような時代の同地域の宗教の様相、およびそれに対応する社会状況に関する研究書であり、カナダ McGill 大学の Institute of Islamic Studies に提出された著者の学位請求論文をもとに書かれたもので、筆者の知る限り、欧米人の手になるこの分野でのまとまった研究としては初めてのものである。筆者はいわゆるイスラム学、インド学の専門家ではなく、本書のようなテーマの研究書の紹介には勿論適任ではない。しかしながら同時代の当該地域に関する研究が極めて乏しいわが国においては、イスラム思想、仏教、ヒンドゥー教、あるいは国際商業ネットワーク等、幅広い内容を持つ本書を紹介することも意味無きことではなからうと拙い筆をとった次第である。それぞれの分野の専門の方々の興味を少しでも喚起できれば幸いである。

以下、本書の内容を紹介していこう。

まず「序」において、著者は扱う時代の枠(93/711年からガズナ朝によりスインドが征服された416/1026年まで)、対象地域(現在のパキスタン南部、ムルタン以北のインダス流域、ムクラーン)を規定し、それを Arab Sind と名付ける。次いで四つの主要論点が明快に

述べられる。第一にアラブ征服時の同地の「非ムスリム」の同定の問題。第二にアラブ征服への同地の住人の協力とイスラームへの改宗や、逆に征服への抵抗といった動きを生みだした宗教、社会、経済的メカニズムの解明。第三にアラブ・スィンド全般を通じての、スィンド内外におけるシンディー・ムスリム *Sindī Muslim* (スィンドに関連するニスバを持つムスリム) の宗教活動の問題。第四にアラブ・スィンド末期に現れたイスマール派の政権について、である。これら四つの問題にそれぞれ一章ずつが割り当てられ、結論を含めて全体は五章からなっている。

第一章では「アラブ征服期のスィンドにおける非ムスリム」の問題が検討される。そのために著者はアラビア語、ペルシア語文献に見える “*budd/butkhāna*”, “*sumanīya/samanī*”, “*bhikkū*”, “*naw-vihār*” 等の、従来確たる根拠のないまま漠然と仏教に関するものであると考えられてきたタームを再検討する。後三者は「仏教」「仏教徒」「仏教僧」「仏教寺院」を表すということが確認されるが、“*budd/butkhāna*” に関して著者は、玄奘が記録するダイブルのシヴァ教寺院やムルタンの太陽寺院もイスラム史料においては同様に “*budd/butkhāna*” と呼ばれていることなどを根拠に、語の響きにも拘らずそれが決して仏教寺院、仏像のみを表すものではなく、何らかの限定がつかない限りすべての非イスラム宗教建築物、あるいは偶像を表しうると結論する。具体的データに立脚したこの説は、アラブ征服時に同地で優勢であったのは仏教であったと短絡的に考える従来の説を厳しく批判する。ただ何か物足りなさを感じるのは、やはり “*budd/butkhāna*” のエティモロジカルな面が明らかにされていないせいであろうか。このような検討の後、著者は史料に見える用例から、当時仏教は主にアロール以南(著者は下スィンドと呼ぶ)に多く広まっており、上スィンド(すなわちムルタン以北)には仏教徒は少なかったと述べる。

これらの作業を踏まえて、著者は当時のスィンドにおいて優勢であった仏教部派の特定を試みている。ここで玄奘の記録(7世紀前半)がほぼ全面的に拠り所とされ、当時のスィンド仏教は大乘であったと述べる Qureshi らの説は否定されて、最も有力であったのは小乗の正量部(*sammitīya*)であったと説明される。正量部以外の部派に関しては、中国の記録から説一切有部(*sarvāstivādin*)や部派不定の大乘の存在の可能性を示している。

仏教優勢説を排した著者は、そこでヒンドゥー教の存在を探る。そして史料、特に *Chach-nāma* にヒンドゥー教ないしはブラフマニズムの存在を示す例が数多くあること、また玄奘がかなりの数の「外道」の存在を記録していることから、当時少なくとも上スィンドにおいてはヒンドゥー教は仏教より優勢であったであろうし、下スィンドにも

仏教徒とはほぼ同数の信者を有していた可能性がある」と述べる。同時にヒンドゥー教の中ではシヴァ教パーシュパタ派(玄奘のいう「塗灰外道」)が有力であったことを玄奘の記録や考古資料を用いて明らかにしている。またイスラム史料ではよく知られている、ムルタンの太陽寺院を中心としたスーリヤ神信仰も有力なものだったとされる。そのほか、確証なしとしながらもヴィシュヌ神信仰、ブラフマー神信仰、インダス河信仰などの存在が可能性として提示されている。

こうして著者は第一章において、従来曖昧に処理されてきたタームの再検討により、アラブ征服時のスィンドの非ムスリム諸宗教の同定にある程度成功している。そしてその上で、仏教の分布はほぼアロール以南の下スィンドに限られたがヒンドゥー教は上下両スィンドに存在し、前者においては小乗正量部が、後者においてはシヴァ教パーシュパタ派がそれぞれ主流であったという、当時の宗教の様相に関する、かなり説得力のある結論に達している。ただ気になったのは、細かなことではあるが著者が玄奘が記録する僧院、仏塔、僧侶の数を例示する際、原文には「数十」「数百」とあるのをすべて20,200と何のこともわりもなく置き換えていることである。この数は仏教徒、ヒンドゥー教徒の割合を試算する際にも基数とされているようで、問題なしとはし得ない。

第二章は「征服と改宗」についてである。アラブによる同地の征服とそれに続く同地の人々のイスラムへの改宗を全体としてどのように捉えるか。この問題に関する従来の説がまず著者によって手際よく二つに大別されている。一つは、アラブによる征服も、その後の改宗も武力によってのみなされたとするもの。今一つは征服はそのほとんどが平和裡に、そして改宗はその全てが自発的になされたものとするものである。著者はこのように従来の説を整理した上でそれぞれの説の問題点を史料に当たりながら丹念に検証していく。その結果両説に関して二つの基本的な問題を指摘する。一つは両説ともアラブの宗教政策と軍事政策を混同しているという点。もう一つは両説ともイスラム、仏教、ヒンドゥー教という各宗教に関する一般論をまず提示し、それをアラブ・スィンドに適用しようとする傾向を持つ、言い換えれば一方はアラブがムスリムであるが故にインドに侵入し、改宗を強制したと主張し、他方はアラブがムスリムであるが故にスィンドの非ムスリムの信仰を尊重し、非ムスリムはイスラムの持つメリット故に自発的に改宗したと主張する、というのである。そこで出来る限り具体的なデータを合理的な方法で処理することにより、著者は征服と改宗について新たな説明を試みる。

彼はまず自分の用語法(conversion, Islamization, adhesion, syncretism等)と方法論を明示する。次いでスィンド征服時のアラブのポリシーを軍事面と宗教面に分けて論ずる。

軍事面でのアラブの基本的態度は「……戦いを挑む者は皆殺せ。妻子を人質とし、投獄せよ。降伏する者には…… *amān* を与え、*dhimmah* として税を定めよ。」という Hajjāj b. Yūsuf の言葉に集約されているとする。一方宗教面については、以下の二つのことを指摘する。すなわち、スィンドの非ムスリムはジズヤを払うことにより旧来の信仰を保持し、破壊された寺院などを再建立し得た。しかしながらジズヤの徴収は土着のスィンド人のカースト・システムに乗る形で行われ、あるいは特定のカーストの民に対しては差別的な規定が適用される例があった。このような検討を通じ著者は、征服時のアラブのポリシーは基本的には改宗よりも服従とジズヤの支払いを求めるものであり、同時にスィンドの旧来のシステム(特にカースト制度)や法的規制を保持し、利用することであったとまとめる。そして第一の点により強制改宗説が、第二の点によりスィンドの民がイスラムの持つ平等性故に進んで改宗したとする自発的改宗説が、それぞれ否定されるとするのである。

さてそれでは征服と改宗は具体的にはどのような形で進んだのか。アラブ・スィンドにおける仏教とヒンドゥー教の状況について従来指摘されているのは、仏教徒がアラブに対してより協力的であったこと、およびアラブ支配期の間にヒンドゥー教が存続したのに比して仏教はスィンドから消えてしまったように見えることである。著者はこれらの観察の正しさを再確認した上で、仏教徒、ヒンドゥー教徒それぞれの新たな権力と宗教への対応の仕方やその後の運命には、両教の教団組織や両教徒の社会的地位階層、経済的特徴が反映されたに違いないとの立場からそれらの現象を分析していく。まずアラブ征服時の仏教徒、ヒンドゥー教徒はいかなる階層の人々であったのか。著者によれば文献的には仏教徒は多くの場合商工業者との関連で現れる。仏教と商業の関連という視点で史料を見ると、他にも両者の関係を示唆する記述がいくつか見られるとされる。それゆえ著者は仏教が都市の商人層を基盤にしていたであろうと考える。一方考古学的資料も、インダス流域の仏教寺院趾のほとんどが主要貿易ルートに沿って存在することを教え(Mirpur Khas, Tor-Dherai 等)、またそのような寺院趾から大量に発見された貨幣や、Depar Ghangro の仏教寺院趾から発見された外地産の玉細工(原石のまま輸入され寺院区域内で加工された)なども仏教寺院をターミナルとした遠隔地商業の存在を示唆するものであるという。このように仏教が都市商人層を基盤とし、遠隔地商業の利潤を享受していたのに比して、ヒンドゥー教はどうであったか。ヒンドゥー教と特定の階層を結び付ける直接的証拠はないとしながらも、著者はいくつかの証拠がヒンドゥー教(あるいはブラフミン王朝)がスィンドの農村部をバックグラウンドとしていた、あるいは個々のブ

ラフミンが農村部に対して影響力を持っていたことを示しているとする。

こうして「仏教＝都市商業民層」「ヒンドゥー教＝農民層」という対応関係を提示した後、著者は当時のスィンドの経済的状況の考察に進み、アラブ征服前夜には同地における遠隔地商業の重要性が下降しつつあったとする。それ以前の時代、東西貿易の主要ルートの迂回路としてスィンドは大きな利益を得ていた。しかしそのような状況は6世紀になると変化する。ササン朝の貿易独占やブラフミン王朝の大規模商業軽視等々の故であると言う。このような社会経済的変化は異なる支持層を持つ仏教、ヒンドゥー教に異なる影響を与えた。ブラフミン王朝治下で満足できる状態になかった仏教徒商業層は、拡大しつつあったアラブの大帝国とその商業的性格に期待を寄せたとされる。

次いで著者はアラブ支配下での仏教徒の改宗と仏教の衰退をも同じ文脈で捉えていく。アラブの征服により前述のような仏教徒の期待はある程度満たされた。スィンドが再び遠隔地貿易の中継点として栄えたことが文献、考古両方面で確認されるという。しかし仏教徒はすぐに再び苦境に立たされる。すなわちアラブがイラン、トランスオクシアナを掌中にするに及んで、イラン・ルートを回避するための迂回路としてのスィンドの重要性は大きく減少した。そのうえ遠隔地商業そのものがアラブ・ムスリムの手に握られていた。仏教寺院のネットワークはアラブの手で建てられたキャラバン・サライに取ってかわられた。しかもムスリム商人はイスラムの商業法によって守られていた。仏教徒商人はもはやムスリム商人に対して如何なる競争力をも持ち得ず、スィンドにおける流通や遠隔地商業が栄えたにも拘らず、仏教徒の社会経済的地位は相対的に劣化した。著者は、彼らがその状態を脱するために都市商業仏教徒から都市商業ムスリムへと転身することを選んだのであろうと述べる。そうしてその後仏教が辿った運命は次のように説明される。都市商業仏教徒の改宗と遠隔地貿易に占める寺院の役割の減少は、寺院組織に基づく仏教教団そのものの衰退へとつながる。その結果寺院は荒廃し、改宗しなかった僧侶は他地域へ移住する。残された農村部の在家信者はカーストに従ってヒンドゥー教に吸収されていったのである、と。

一方ヒンドゥー教はその基盤を農村部に置いていたがために、仏教ほどにはムスリム支配による社会経済的影響を受けなかったという。一つには前述の如きアラブのポリシーのゆえにブラフミンとカースト制度が保持されたためであり、今一つはヒンドゥー教の持つ宗教的柔軟性の故と言う。アラブ・スィンドにおいて著された“*Devala-smṛti*”の如き法律書ではムスリムは“*mleccha*(カースト外)”, “*caṇḍāla*(牛を喰う者)”とされ、彼らとの接触は汚れであり、「再浄化(*repurification*)」の手続きを必要とする

述べられる。著者はこれらの記述に、ムスリムをカースト外と規定することにより彼らをもカースト制度の中に取り込み、同時に彼らとヒンドゥー教徒との相互作用をも法制化する同教の柔軟性を見て取るのである。

このように著者は第二章において征服と改宗の過程、特に仏教徒とヒンドゥー教とのムスリムに対する対応の違いと両教のその後の運命とを社会経済的状況と関係づけて鮮やかに説明している。研究史の整理も手際よく、論旨も具体的かつ明快で説得力を持つと思われたので、以上やや詳しく紹介した。直接的証拠の不足を補うための補足資料の博搜ぶりにも驚かされる。

第三章「シンディー・ムスリム」においては、アラブ征服以後、イスマール派の台頭迄の時期の同地のムスリムの宗教活動が扱われる。しかしこの時期は征服期にも増して資料が希薄な時期である。僅かにみられる地理書、旅行記中の記述も何らかの具体的なイメージを形成するには全く不十分である。そこで著者はプロソポグラフィカルなデータに着目する。具体的には人名辞典的資料に現れるシンディー(Sindī)あるいはシンドに関連するニスバ(Daybulī, Manṣūrī 等)を持つ人物を抽出し、彼らの動向を分析しようとするのである。著者は、個人に関してはニスバと地域が特定の関連を持つとは言い難いと認めながらも、集団についてはある程度の関連を見いだし得るとし、個人ニスバは少なくともその個人が育ったバックグラウンドがその地域と何らかの関係を持つことを示すと規定した上で、実際にシンド関連ニスバを持つ者達の宗教活動の検討に進む。

第一に取り上げられるのは伝承学者、ハディース学者達である。アラブ征服時から5/11世紀までシンド内外において宗教的活動を行ったと確認し得るシンディー・ムスリムは70人にのぼるが、そのうちの51人が伝承学者であると言う。著者によればシンディー・ムスリムの伝承学者達は、コーラン、ハディースを非常に重視し、キヤース等を認めない“*ashab al-ḥadīth*”と呼ばれるグループに属していた。シンドにおける伝承研究の発生については、与えられた材料からは知り得ないとするが、その後の状況については、伝承学者中に占めるシンディー・ムスリムの伝承学者のパーセンテージの時間的推移によって、彼らがシンド征服後まもなく中東地域に現れ、3/9世紀にその数がピークを迎えることを示し、4/10世紀に伝承研究の黄金期が来たという Ishaq らの説は支持されないと述べる。それでは何故シンドにおいて伝承研究が好んで受け入れられたのか。この疑問に対し、著者は興味深い解答を用意する。著者は仏教の律蔵(*vinaya*)とハディースの形式的類似を指摘した上で、シンドの伝承学、より特定するな

ら *aṣḥab al-ḥadīth* と小乗正量部がともに厳格なる textualism を特徴とするという共通点を見いだす。そうしてこのように二つの異なるものの類似点を列挙して比較するという方法による論議は元来解答が出ない類のものであると断った上で、改宗が前章で述べられたように起こったのであれば、改宗者達が自分の昔の宗教的認識により近しく好ましいものを選んだという状況を期待できるのではないかと控えめに述べるのである。

第二のグループは神秘主義者(ṣūfī), 禁欲主義者(zahid, faqīr)である。彼らに関する伝記的情報は少ないとしながらも、個人の超自然的力を信ずるが故の苦行主義の傾向がうかがえると述べる。そして著者はムスリム社会が非ムスリム社会との相互作用の中で自らの優位を保つために奇跡的力を利用しようとしたのではないかと推論する。また有名なイランの神秘主義者 Abū Yazīd al-Bisṭāmī に対し、Abū 'Alī Sindī を通じてインド思想が影響を与えたという従来の議論に関しては、それらが、例えば神秘主義に影響を与えたのは3/9世紀に南インドで盛んであった Śaṅkara の Vedānta 不二元論であるとするような、地域性、歴史性を無視して「インド思想」というものを想定した上での議論だと批判する。もしそのような議論をするのであれば、著者が同定した小乗正量部とシヴァ教パシュパタ派についてこそ行われるべきだと主張するのである。そして著者は試みとしてパシュパタ派と神秘主義を比較し、*avitatkarāṇa* と *malāmah*, *avitadbhaṣaṇa* と *shataḥat*, *nirvāṇa*(パーシュパタ派の)と *fanā'* といった類似点をあげる。勿論これも結論が出る類の話ではないが、著者はこの作業を通じて、スィンドの地域性、歴史性に密着した議論を行うという立場をあらためて主張しているかの如くに見える。

次いで著者はシーア派、ハワーリジュ派、法学者、コーラン学者、カーディー、ハティーブ、哲学者等のグループについて述べるが、これらの者達に関しては資料が余りにも少ないようで、上記のグループが存在したということを確認するにとどまっている。ただカーディー、ハティーブに関してはそれらの職が世襲されていた可能性を指摘している。

こうして第三章ではアラブ・スィンド期のスィンド内外における上記のようなグループの存在が確認され、伝承研究の優勢という傾向が指摘される。筆者には特にニスバに関する著者の見解と、正鵠を射ているか否かは別として小乗正量部と *aṣḥab al-ḥadīth* の、そして神秘主義とシヴァ教パシュパタ派の比較が興味深かった。

第四章「アラブ・スィンドにおけるイスマール派」では、ムルタンにおけるイスマール派政権樹立とその崩壊の歴史および同地のイスマール派の特徴が分析される。

まず著者はイスマール派登場以前のスィンドとシーア派、アリー派の結びつき、特

に2/8世紀の、「純粋な魂」Muhammad b. al-Ḥasanの反乱に関連する動きを述べ、次いでイスマーイール派のスインドでの活動を語る。確認できる最初の例はal-Haythamという名のダーイーが270/883年頃ヤマンからスインドに派遣されたという記録である。その後、ファーティマ朝カリフ・アルムイッズの時代(334-65/953-75)に一人の無名のダーイーがムルタン地方の多くの非ムスリム(おそらくヒンドゥー教徒)をイスマーイール派に改宗させたと伝えられる。このダーイーが死んだ後、354/965年頃ムルトンの支配者Sam家を打倒し、イスマーイール派の政権を樹立したのはJalam(Ḥalam/Ḥalīm)b. Shaybānであった。しかしこうして樹立されたイスマーイール派の政権も約五十年後の401/1010年には、ガズナ朝のスルタン・マフムードによって崩壊せしめられる。その後のイスマーイール派については情報は極めて少なく、彼らの残党が起こしたと思われる反乱のことや、一部がドルーズ派に姿を変えたのではないかと考えが述べられるのみである。

歴史的経緯の考察に続いて著者はイスマーイール派の活動が同地のムスリム、及び非ムスリムに与えた影響を検討する。前者に関して著者は、シンディー・ムスリムの伝承学者の数が、3/9世紀以降減少を始め5/11世紀には消え去ってしまうことの原因をイスマーイール派の活動に求めるIshaqらの説を批判し、伝承学者の減少とスインドにおける小王国(ムルトンのSam家、マンスーラのḤabbar家等)の分立による政治的分裂状態、およびそれに伴う経済的分裂を結び付けて考えようとする。ダイブルの遺跡から発見される貨幣には3/9世紀以降の金貨、銀貨が見あたらないが、筆者はこれを政治分裂にともなう国際商業衰退を示すものとみなし、その結果として起きたスインドの経済力の減退がスインド内外での宗教エリート達の活動を大きく妨げたのではないかと推測するのである。以下著者は3/9世紀以降のスインドの商業経済力の衰退という考えをもとに、ファーティマ朝の布教政策とインド洋貿易を関係づける有名なLewisの説をスインドに関して再検討し、またイスマーイール派が上スインドのヒンドゥー教徒達の改宗にある程度成功した事情を考察していくのであるが、そもそもほとんどダイブルの貨幣のみを根拠にした議論は前三章に比して説得力に欠ける。その上具体的史料の少なさが本章後半部を、それ以前の明快な議論に比して抽象的で複雑なものとしているように思われた。勿論筆者の理解力の不足のせいもあるのだが、正直なところ本章の後半部の内容は理解しにくかった。しかしながら資料の絶対的不足という状況を考えればやむをえぬことかも知れない。

第五章「結論」はその名の通り本書の内容をこれも手際よくまとめたものであり、実際のところ、序論とこの部分とを読めば著者の議論のポイントが全て理解できる仕組みになっている。

以上、長々と内容を紹介してきたが、最初に断った通り、筆者は本書の扱うテーマのほとんどについて素人である。時折感想めいたことを書き狭んだが、随分と的外れなことも多いと思う。しかし的外れついでに本書全体についての印象をもう少し書き加えておきたい。筆者の理解する限り、本書において著者は、従来の研究者達が、時にはスインドをしてインド全体を代表させたり、あるいはイスラーム、仏教、ヒンドゥー教をそれぞれ一般化してスインドにおける各宗教の状況を論じたりしてきた点を鋭く批判している。著者の、より歴史的地域的事情を考慮し、地に足のついたアプローチをとるべきだとする態度は全く正しいものであろう。そして本書において著者はその実践にほぼ成功していると思われる。ただ全体を通して一つ気になったのは、文献史料、特に *Chach-nāma* に対する史料的評価がほとんど記されていないことである。著者は特に前半二章において *Chach-nāma* を、従来の説を批判的に検証する最大の武器として用いている。おそらくは8世紀にアラビア語で書かれ、現在では12世紀頃にペルシア語訳されたもののみが残っている同史料は、文学性が強いとして前世紀には史料価値なしとされていた。今世紀に入ってから再び見直され、積極的に利用されるようになってきたが、それでも慎重な取扱いが要求されている。このような事情があるだけに、それ以外の点では著者の驚くべき堅実さと慎重さが発揮されている本書が文献史料の解説、評価の項を欠くのは惜しまれる。

尚、巻末には595篇もの文献を挙げる bibliography が付されている。それらに裏打ちされた著者の研究史整理も信頼できるものとなっている。その意味では本書はこの時期のスインドに関する従来の研究の総決算となっていると言えよう。しかし本書はそれだけにとどまらない。インドにおけるムスリムと非ムスリムの最初の接触という大きな文化現象を解釈する一つのモデルを提示することにより、本書は今後のアラブ・スインドに関する研究のみならず、11世紀以降本格化するムスリム勢力の北インド進出を考えるための出発点をも準備しているのである。このような優れた労作を公にされた著者 Maclean に敬意を表して拙い紹介を終える。

(E. J. Brill, Leiden, 1989, x + 191 pp.)